

八潮に住む魅力

建築家5人が感じる「八潮らしさ」とは

巻頭 special!

八潮らしく、
家をつくるということ

「八潮らしい家づくり」

とは、どういうものでしょうか？

『家づくり』を考えるにあたり、
大学で教鞭をとり、また、これまで
4年間にわたり八潮市内で連携
5大学（p.8参照）として調査・研究を
されてきている5名の**建**築家と共に
座談会を実施しました。

建築家が語る「八潮」に住むことの
魅力 から見えてくる「八潮
らしい家づくり」の**ヒ
ント**とは・・・？

パネリスト

小川 次郎 （日本工業大学）
坂牛 卓 （東京理科大学）
曾我部 昌史 （神奈川大学）
槻橋 修 （神戸大学）
寺内 美紀子 （信州大学）

コーディネーター

堀江 佑典 （昭和株式会社）

※平成24年8月7日に八潮メセナで行った
座談会を基に、掲載しています。

家づくりの面白さって なんですか？

八潮の魅力とは何なのか、あるいは家づくりとはどういったものなのかについてお話を伺いたと思います。住まいや家づくりをどのように捉え、どのように住もう方にご提案されているのかという点についてお聞かせください。



小川 あくまで一般論として聞いていただきたいのですが、「家を建てたい」と相談を持ち掛けてこられる方の中には、間取りはどうか、水廻りはどうかといった具合に、家というのはある程度パッケージ化された

ものとお考えになる方がいます。だけど私達はどのような場所に土地があるのか、例えば隣に用水路が流れているだとか、そういうところからそこの住まい方をイメージしていきます。ですから、もう少しまわりの環境とか住まい方から、最終的に住宅になっていけばいいのにな、といつも感じています。

住まい手は、 その地域を構成する構成員の一人

曾我部 最近は建物をつくることというのが、自分のためだけでなく地域全体に大きな影響をもったことをやっているという感覚が無いじゃないですか。自分のお金で自分の敷地に建てる以上、好きなものを建てていいという意識がずっとある。高度経済成長を支えた意識に

関連していると思うのですが、もはやそうではない。その地域を構成するひとつの構成員として、どういう家をつくるのがいいのか、そういう意識をきちんと持ちながら（心に）余裕を持って「家づくり」について考えるようになっていかないといけないと考えています。



—— エンドユーザーの方もそういった地域をつくる構成員の一人だということですね。家といってもやはり公共性を持つというものであるということ、依頼主の方とどのように共有されていっていますか？

曾我部 その意識を共有することはそんなに簡単ではなくて、まず我々建築家が責任を感じながらやらないといけない。家をつくるのに手間をかけたくないと思っている人は多いけれど、家をつくる人こそが、ややこしいと思われそうなこと、例えば隣に配慮するだとか道路から見える部分はどうか、そういうとにか面倒くさいことまで考えなきゃいけないというプロセスを受け入れようというふうになって欲しいなど。ですから、建て主の方とはそういう時間を極力つくりたいなと思っています。

—— 続いて槻橋さん、お願いします。

家づくりは大きなお祭り。地域にとっても楽しいことであってほしい

槻橋 家をつくるにしても建物をつくるにしても、何か

ひとつの大きなお祭りだと思っています。地鎮祭があったり上棟式があったり。地域によっては上棟の時に餅をまいて本当にお祭りのようだったりするところも残っています。せっかくお祭りをするのだからお施主さんには120%楽しんでもらいたいなというふうに思います。ですから、そのお祭りを一



緒に考えて段取りをすることが設計者の役割じゃないかと。それにお祭りをやるわけですから、地域と係るわけですね。地域にとっても、家がだんだん建ち上がってくるといことが、何か楽しいことであって欲しいというふうに思います。楽しく住むということが一番の目標だと思うので。

—— 家というものがパッケージ化されたものではなくて、家をつくると決めるとき、その土地のまわりから読み取っていくプロセス自体も楽しくするための第一歩というふうに捉えて、家づくりを楽しんでいてもらいたいということですね。

寺内さんは、家づくりについてどのようにお考えですか？

地域に根ざした住まい方を一

寺内 3.11の震災が起こって、専門家であろうとかなろうと、家だけではなく建物に対する失望と絶望が非常に大きかったと思います。家というのは社会の状態と対応するから、時代によってある種のトレンドみたいなものがあつたわけですが、震災以降は非常に冷静に、家とは何か、家族とはどうあるべきなのかということに、大袈裟ですが国民が注目しているのではないのでしょうか。だから、家をつくるということに対する意識は今す

ごく高いし、本格的な議論も可能だと思います。

一方で今、大学の関係で長野に住んでいるのですが、最近建った住宅を見学させてもらうと、すごくローカルティーがあるんですね。場所に対す



る使い方とか家族がどこに集うとか、非常にローカルティーがある。地域に根ざした住まい方は、これから住宅を考えていくうえでひとつの重要なカギになるのではないかなと。

雑誌やパンフレットなどから好きなパーツだけを抜き取って、それらを全部やったらいい家になるかというそうではない。やっぱり、地域に合った住まい方をしっかり考えることが重要ですね。

坂牛 最近のクライアントは、手入れをしなくても永久に使える家が欲しいと言うわけです。メンテナンスフリーと言うんだけど、そもそも家というのはお手入れするものであるというのがひとつあります。建築って使っていれば汚れるものだと。汚れたらちゃんとお手入れをする。そういう感覚がクライアント側にもないとやっぱり

建築って長持ちしないし、木造の家なんてすぐに壊れてしまう。それからもうひとつは設計時間の話です。ゆっくり時間をかけてお互いに敷地に何度も足を運んで、秋はこうだ冬はこうだ、というような感覚を共有してつくりなると、冬にできた家が夏になって暑いとなったりするわけですよ。だから1年間ゆっくり考えましょうよと。家をつくるわけですから、そのくらい時間をかけてやりましょうよと言いたいなと思っています。



—— 地域の文化というのをちゃんと踏襲して家を愛していくというか、住まい方についても地域性を反映して

いくということだと思のですが、昔は板の間を雑巾でみんなで拭いたりとか、梁が出ているところはハタキではいたりとか。そういうメンテナンスの仕方も話しながら家づくりをしていくことが大切なんです。

八潮ならではの「つながり」をどう捉えますか？

—— 八潮らしい家づくりとして、「つながり」というのを大切なテーマとして掲げています。

➡ 家づくりのコンセプト p.28

家族のつながりや地域のつながり、公共性という意味での街並みのつながり。そういうものを家づくりでどのようにして体現化していくか。つまり、八潮の魅力であったり八潮らしいライフスタイルというものを、家族や地域、街並みに対し、どのように考えていくべきか、具体的なご意見をいただけますか？

八潮はいい意味でややこしいから、家族や地域をつながりやすくしている。

曾我部 八潮は高度経済成長の波に揉まれていないという大きな特徴があります。今はつくばエクスプレスのまわりに新しく開発されている土地が出来つつある状態なんだけど、最近こういう風景は首都圏では見ない。都市化の状況と田んぼや倉庫が混在している状態が八潮にはまだ残っている。もうひとつの八潮の特徴は、すごく平坦なんだけど、整然としたグリッドでまちが構成されていないということです。土地は平らなんだけど、道はまっすぐじゃない。八潮はいい意味でややこしい。

そういうところが家族や地域をつながりやすくしている。八潮の場合はまだ自由度があるから、つながりをもう一度再評価できるような状況にあるなど。

そういう意味では、地域産業みたいな分かりやすいものだけではなくて、その場所そのもののことをもう一度考える。隣に高架があるからどうだとか、視線はどう見えるとか、風がどう抜けるかとか、シークエンス（回遊性）はどうだとか、そういうことを細かく考えながら考えていくということが可能なのが八潮における住宅の設計なんじゃないかなと。大変面倒くさいんですけど、楽しい。

「まち」とつながりやすいスケール感

榎橋 似たような話になりますが、八潮はなんだか小

さいものが多い。つくばエクスプレス沿線の中で唯一の懐かしいものを持っているなという印象があって。小さいものでつくられているということが、逆に言うと、家を作った時に「まち」とつながりやすいんじゃないかなと。八潮は地域や街並みとつながるということが、すごく地続きに同じ空気で作って、それが「まち」とつながって、というのが感じられる場所なんじゃないかなと思います。





—— 八潮市の行政の方は、このような意見をどのように捉えますか？

地域が楽しくつながるような暮らしへー

八潮市 都市づくりをどう進めていけばいいのかなと考えた時に、着目するのは最終的に一つ一つの家なんじゃないかなと。ひとつの家が綺麗であれば、いい「まち」なのかというところでもないのかなと思うんですね。やっぱり、地域が楽しくつながるような暮らしをすることが、八潮での家として、また最終的には八潮市としていい「まち」になっていくのではないかなと思っています。家の住みやすさというのは、隣とのつながりや地域とのつながりといったもので出来てくると思うので、ひとりひとりがそのまちに対して愛着や関心を持つということが大切なのかなと思いますね。



八潮ならではの「家づくり」の楽しさは？

—— やしお家づくりデザインマナーブックを使いながら家づくりを考えていくにあたって、より楽しくなるようなヒントをお聞かせください。

空間的ゆとりが暮らしを豊かにする。

小川 水路とか農地が残っているというのがとても重要だと思うんですよ。例えば水路と言っても、実際に住んでいる人にとっては夏になれば虫が出てきてとか雑草が生えてきてとか、ネガティブな面もあると思うんです。だけど、少なくともそこは空間的に空いている場所なわけなんですよね。隙間みたいな。そういう場所が市全体に網目のように張り巡らされていることで、空間的なゆとりを生み出している気がするんです。農地は農地として残して行って欲しいし、水路もきれいに出来るものはきれいにしていって欲しい。そういう空間があるということは、すごく大きな八潮のストックなんだということ

を是非住んでいる人達に感じて欲しいんです。そうすると、隙間という一見無駄に見える場所がいかに「暮らし」というものに対し余裕を生み出すか、ということが段々浸透してくるんじゃないかと思うんです。隙間とか、そうした八潮ならではの空間の豊かさを残して行って欲しいと思っています。

—— 平坦だけど整然としていない、あるいは水路とか、一般的にはネガティブな要素というのを逆に魅力的な生活環境に転換していくというようなお話ですが、そういう八潮ならではの魅力やアピールポイントについてどう捉えていますか？



寺内 古くから住んできた方々は中川や農地などそれぞれのアイデンティティーになるような大事なものがあるということを主張していただけるんですが、若い世代の方に八潮のいいところを聞くと「何もないところ」っておっしゃるんですよ。実は水路や農地などのなんとも言えない余裕が、若い世代の方にも魅力として伝わっている部分もあるんです。そして、そういう若い世代の方が八潮のこれからの大きな担い手になっていくだろうと思うんです。つまり「何もないところがいい」という新しい感性を持った世代に、これからもっと八潮をアピールできるんじゃないかなと。それで街並みも変わってくると思うんです。

八潮には、なんとなくあいまいなスペースがいろいろあって、外に開ける可能性を持っている

坂井 マナーブックの中に、くつろぎのスペースとして縁側をつくらうというアイデアがありますが、すごくいい。

➡ くつろぎの空間づくり p.34

これは簡単に言うと、建物の一部分が外部に対して開かれていて、通りがかりの人などと話せるようなスペース
やしお家づくりデザインマナーブック 7



スなので、縁側をつくるということが社会とつながることになるんですね。これを東京でやろうとして建物を開くといろいろと大変なことが起こるわけですが、八潮には水路などなんとなくあまいなスペースがいろいろあって、外に向かって開ける可能性を持っている。家が全開でお父さんがゴロンと寝ていて（笑）。家の前に少し農地があって距離感があるから、開いていてもあまり気にならないという。八潮だから、視覚の関係と土地が切り離せない関係性を持っているからこそ、こういうことができる可能性があるんだろうと思います。

——（笑）街と人との距離感がちょうどいいんでしょうね。家の前を歩く人と家の中にいる人との。5人の建築家の方から「家づくりとは」というテーマでお話を伺いました。では、今日は学生の方もみえているので、学

生さんにも聞いてみましょう。八潮に住んでいる方や八潮で家を作っていくということに対して、建築を学んでいる学生の視点として、どういう魅力を感じているのかお聞きしたいと思います。

学生 最初の印象は、都心に近いのに自分の地元にすぐく似ているなど。川に挟まれていて農村だったところなんかが。ベッドタウンに近い感じになっていったんですが昔ながらの家も残っていて、そういう混在している場所というところも似ています。なので、たぶん八潮に対して他の人と違うノスタルジーみたいなものがあるんじゃないかと思うんです。

学生 これだけ平らな土地で川が近くにあって、風を感じられる場所であつたりということが新しい感覚でした。

—— なるほど、確かにそうですね。景色だけではなく、風や人の通りなど、平坦な土地ならではの周りの空間の取り入れ方というのも、八潮らしさにつながるのではと考えています。

今日はありがとうございました。八潮で家をつくりたいと思っている人にとって、家づくりってこうやって楽しんで出来るんだとか、家族や地域のことを考えてつくることが出来るんだ、と思えるきっかけとなるものにしていきたいと思っています。

パネリスト



小川 次郎

日本工業大学 工学部建築学科教授

日本工業大学百年記念館 / ライブラリー&コミュニケーションセンターで日本建築学会作品選奨（2010）を受賞



坂牛 卓

東京理科大学 工学部建築学科教授

建築設計事務所 O.F.D.A.associates を共同設立（1988）/リーテム東京工場 international architectural award2007/ 角窓の家 日本建築家協会優秀建築選（2007）など受賞



曾我部 昌史

神奈川大学 工学部建築学科教授

建築設計事務所「みかんぐみ」を共同設立（1995）住宅、保育園、ライブハウスの建築設計から家具、プロダクト、インスタレーションまで幅広いデザインを手がける。



槻橋 修

神戸大学大学院 工学研究科建築学選考准教授
元東北工業大学工学部建築学科講師

ティーハウス建築設計事務所を設立（2002）「建築ノート」など数多くの建築に関する書籍を監修。



寺内 美紀子

信州大学 工学部建築学科准教授

寺内美紀子建築設計事務所（2003～2005）
人人ニュータウンひたち野中央「脱・都会派の夢」くらしと住まいのコンクール優秀賞を受賞（2001）

コーディネーター



昭和株式会社（まちづくりコンサルタント）
堀江 佑典

建築計画や公園計画をはじめとして、地域づくりや景観づくり、コミュニティづくりなど様々な地域のまちづくりに従事。

